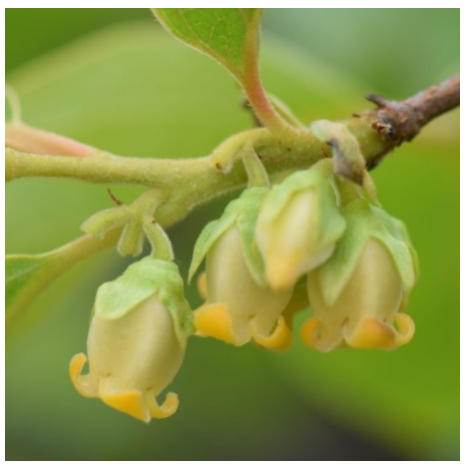
柿の花

清少納言には宮中で過ごす、自身の季節感がある。諸兄もご存知の枕草紙「春はあけぼの・・・」には、彼女が好む四季が書き記してある。今の日本は、北海道から沖縄まで各々の四季がある。八十年ほど前は、満州から南洋まで版図があった日本は、更なる季節が人々にあった筈である。一四〇〇年ほど前は、朝鮮の同盟国「百済」と盛んに往来があったから、韓南の四季も人々に詠まれたことであろう。詩は季節と共にある。

春は夜　屋根に微かに　音は降り
一面覆う　柿花の海
夏は朝　蝉は忙しく　呼びかけて
宿題放り　松の木の下
秋は明け　霜降る庭を　足踏みて
堅き土さえ　盛りて輝く
冬は暮れ　シチューの鍋の　台所
湯気の傍から　母の問う声



昔し、庭に大きな柿の木が何本もあった。枝葉を屋根に掛かって伸ばし、花は、チューリップを極々小さくした様な薄黄色である。夜間に瓦屋根の上に、コン、コロコロコロと、微かに音を立てて落ちてゆく。「柿の花」の季語は夏だが、季節感は晩春である。翌朝には庭一面に花は敷き詰められていて、海となる。

花落ちる音楽は昼間は聞こえない。それは夜間に机に向かう時か、あるいは布団の中で、天井を越えて耳を澄ます時である。花弁の膨らみが太鼓のように振動し、瓦の坂を駆け下りる。花の雨は庭全体に降り、一夜明ければ庭の川砂の上に撒かれた柿花の海が出現する。

時が経ち、次第に茶色となる海は、松葉箒で浚うのだが、毎日、庭の片隅に追いやられた柿の花は、遂には砂混じりの貝塚のように、いや、花塚として堆積する。

令和三年十一月四日

大中臣正比呂